

一八六二年の日本使節——ドイツからロシアへの旅

ワジム・クリモフ

一八六二年、日本の歴史上初めてヨーロッパに外交使節が派遣された。その目的は、江戸と大坂の二都市および兵庫県と新潟県の二つの港を外国人の自由訪問のために開くことを延期する、開港延期の件に関する問題解決であった。幕府の外交使節たちは、フランス、イギリス、オランダ、ドイツ、ロシア、ポルトガルを訪問した。ベルリンでの交渉の後、日本使節はサンクト・ペテルブルグに向かった。

既に一八六二年の六月初め、日本使節のペテルブルグ入りに関し、列車を使いワルシャワ駅に到着するか、あるいは、ロシア艦艇で海上から入るか、という二通りの案が検討されていた。一八六二年六月一五日、最終決定がなされ、ツァールスコエ・セローからは宮内省官房第二課から、任に当たる儀典長で四等文官であるイヴァン・アレクサンドロヴィチ・リボピエル伯爵（一八一七—一八七二）に対し、書面による指令が送られた。その指令書には、「皇帝陛下は、最終的に、日本使節を官有汽船で海路当地に運ぶことをご許可なされた」と書かれていた。⁽²⁾

海軍省は七月一日、担当局に対し、使節を運ぶために蒸気フリゲート艦スメリー号が任命され、七月二日にシユテチン【ドイツ語表記では *Stettin* ステッテン。現在はポーランド領内のため *Szczecin* シュチュエチンと表記】に向けて出発すること、⁽³⁾ その際、外務省管下の官吏一名を乗せることを伝えた。⁽⁴⁾

使節応対についてはその一切が、侍従武官長 **【генерал-адъютант = general adjutant】**ニコライ・パヴロヴィチ・イグナチエフ（一八三二—

一九〇八）に任された。もともと、イグナチエフはまだ外国から戻っておらず、そのため外務省は、副宰相アレクサンドル・ミハイロヴィチ・ゴルチャコフ（一七九三—一八八三）の名で、海軍省長官ニコライ・カロヴィチ・クラツベ（一八一四—一八七六）に対し、蒸気フリゲート艦スメリー号の出発は延期すること、ただし、ドイツに向けいつでも出発できるよう準備しておくこと、を要請した。⁽⁵⁾

スメリー号はバルト海艦隊の軍艦であった。スヴィネミュンデ【ドイツ語表記 *Swinemünde*、現在はポーランド領、*Swinoujście* と表記。シフィノウーイシチエ】に出発する際、同艦は「食糧、物資等積荷」に関する通知によると、次のものを積んでいた。食料は二〇〇人前一ヶ月分、水二〇〇人前一ヶ月分、薪二二日分、艦の装備品 **【инвентарные принадлежности】**は三ヶ月と一四日分。その内訳は薪が一サージュンニアルシ⁽⁷⁾、蒸気機関一九〇時間稼働分としての石炭二一、〇〇〇ブードである。⁽⁸⁾ 大砲一門に付き砲弾は五〇発、訓練砲弾五発。操舵室 **【рулевой якорь = navigational part】**には、バルト海とドイツ、イギリス運河航行のための地図、機器が配備された。また、医薬品は二ヶ月分が確保された。⁽⁹⁾

名簿には、陸軍将官、海軍将官、幕僚、海軍上層士官等と並んで、艦長パーヴェル・レヴィツキー海軍中佐を始め、士官、クロンシュタット港湾長官付海軍軍令部高級参謀 **【старший адъютант штаба = senior adjutant of the staff】**ワシーリー・モジャイスキー海軍少佐、外務省アジ

ア局官吏フォードル・ロマノヴィチ・オステン＝サケン（一八三二—一九一六）、皇帝官房からはアレクサンドル・ランガンスの名が記されている。⁽¹⁰⁾艦に乗り組んだのは全部で二五一人であった。⁽¹¹⁾「クロンシュタット報知」紙【Кронштадтский вестник】上は、早々とあらかじめ次のように報じられた。「海軍省からは、日本使節出迎えのために、大公・元帥の副官、カズナコフ海軍少佐が任命されるはずであった。しかしながら、この情報は実現しなかった。すなわち、カズナコフ海軍少佐は大公と共にワルシヤワに行っており、代わりに、クロンシュタット港湾長官付参謀【альбиант праба = adjutant of the staff】ワシーリー・モジャイスキー海軍少佐が任命されることになった」⁽¹²⁾。

侍従武官長クラツベは、「日本使節の出迎えにシュテチンに派遣するのは蒸気フリゲート艦スメーリー号、使節随行は軍令部参謀【альбиант праба】・クロンシュタット港湾長官副官ワシーリー・モジャイスキー海軍少佐。以上、任命に付き皇帝陛下のご裁可」を仰ぎ、裁可を得た。文書の左部分にクラツベの自筆で「陛下ご裁可」一八六二年六月二五日。ツアールスコエ・セロー」との決裁が記されている。⁽¹³⁾蒸気フリゲート艦スメーリー号は四〇〇馬力の動力装置を持ち、大砲を八門装備している。⁽¹⁴⁾艦の全長は一九九フィート一〇インチ、幅は三六フィート二インチ。⁽¹⁴⁾艦の起工式は一八五七年九月一〇日、進水式が行われたのは一八五八年一〇月八日であった。サンクト・ペテルブルグのオフテンスキー造船所で建造され、造船の責任者はカルポフスキー陸軍中佐であった。「欧行日記」（「ヨーロッパ旅行日記」の意）の中で淵辺徳蔵は、スメーリー号には大砲が四門装備されていると記しているが、これは誤りである。⁽¹⁶⁾ワシーリー・ワシーリエヴィチ・モジャイスキー（一八二八—一八六八）は、ロシア帝国海軍士官として、ごく当たり前の道歩んだ。彼の父のワシーリー・チモフェエヴィチ・モジャイスキーは退役海軍少佐で、

モジャイスキーがまだ幼い時に亡くなった。彼の後見人である海軍少佐ヤコヴ・アナニエヴィチ・シェフマノフは、自分の名で、一八三四年、皇帝ニコライ一世宛に海軍士官学校【морской кадетский корпус; 完全に直訳すると Marine Cadet Corps になる。cf. U S Marine Corps は現米海兵隊】にモジャイスキー少年を入学させてもらうべく請願書を出した。その請願書の中で少年に付き、一九二八年一月一日に生まれ、九日に洗礼を受け、現在七歳、読み書き算数を身に付け、「真に貴族の真骨髄を備えており、故モジャイスキー海軍少佐の実子に相違ありません」と記されている。⁽¹⁷⁾父モジャイスキーは海軍少佐であったが、一八二四年五月一五日の退役時は中佐に昇格。退役は「勤務で健康を損ねたため、年金は満額の年間七二〇ルーブルであった」⁽¹⁸⁾。ワシーリー・ワシーリエヴィチ・モジャイスキーの勤務歴を以下に記すことは無駄ではないであろう。

一八三六年五月九日 アレクサンドロフスキー海軍士官学校中隊に生徒【кадет = cadet】として入学。

一八三九年一月二四日 海軍士官学校に同じく生徒として移る。

一八四二年一月九日 海軍士官候補生【кадетские мидшипман, naval cadet】に任官。コルベット艦ワルシヤフスキー公爵号でバルト海を巡航。

一八四四年 フリゲート艦アレクサンドル・ネフスキー号、次いで、プロゼルピナ号でバルト海を航海。同年八月九日海軍少尉に任官。

一八四五年—一八四五年 テンデール艦レーベチ号でフィンランド湾の各港を巡航。

一八四九年二月六日 海軍大尉に任官。

一八四九—一八五〇年 ヴォラ号でバルト海を巡航。

一八五二—一八五二年 蒸気フリゲート艦グロジャシイ号でバルト

海、プロシヤの各港を巡航。

一八五二年二月一七日 海軍第三分艦隊第二艦隊参謀に任命。

一八五三年 アルシス号でフィンランド湾を巡航。

一八五四—一八五五年 スヴェアボルグ要塞攻防戦に参加。アンドレイ号、イエゼキイル号に乗艦し、スヴェアボルグ港外に対峙。英仏連合艦隊の攻撃からスヴェアボルグ要塞防衛。

一八五五年七月二日 海軍第三分艦隊司令長官付参謀に任命。聖スタニスラフ第三等剣飾勲章受章。

一八五六年 海軍第三分艦隊司令部高級参謀【старший адъютант = senior adjutant】に任命。ヘルシンフォルスからペテルブルグまで軍雇【вольнаѣмный = civilian or merchant】蒸気船ナヂヨジヌイ号を退去させる。聖アンナ第三等勲章受章。

一八五八年、一八五九年 フリゲート艦グロモボイ号に乗艦、イストミン海軍少将指揮下艦隊参謀として、大公海軍元帥旗を掲げて地中海を航海。

一八五九年九月八日 海軍少佐に任官。

一八六〇年二月一五日 クロンシュタット港湾司令長官付高級参謀【старший адъютант = senior adjutant】に任命。

同年三月二九日 司令部副官と名称変更になり、デスクワーク職に。
一八六二年 蒸気フリゲート艦に乗艦、日本使節を出迎え、スヴィネミュンド【Свинемюнд】からクロンシュタットまで使節に随行。聖スタニスラフ第二等剣飾勲章受章。

一八六五年 聖スタニスラフ第二等帝冠剣飾勲章受章。デスクワーク職のままで、クロンシュタット軍務知事専任【дежурьство управления кронштадтского военного губернатора】高級参謀【старший адъютант】に任命。

一九六六年一月一日 海軍中佐に任官。同年二月一九日予備艦隊

【резервный флотиле = reserve fleet】に配属する。

一八六八年五月六日 死亡により除隊。⁽¹⁹⁾

以上の勤務歴から分かるように、ワシーリー・ワシーリエヴィチ・モジャイスキーは、幼少の頃から、まさにその全生涯を祖国のために捧げたと云ってよい。

海軍少佐 V・V・モジャイスキーに対し、どのくらいの額の俸給を定むべきかという問いには、「クロンシュタット港湾司令長官付海軍軍令部参謀の職務遂行者に対しては（中略）七五チェルヴォニエツの増額⁽²⁰⁾、すなわち俸給表第三等級者が海外に派遣される際の旅費の半分額相当の割増金を支給せよ」との指示が出された。⁽²¹⁾

アジア局は、日本使節の来露に当たり、局長ニコライ・パヴロヴィチ・イグナチエフ（一八三二—一九〇八）および外務次官【Говарин министр = Vice minister】ムハノフに代わり、副局长ビョートル・ニコラエヴィチ・ストレモウホフの名において、海軍省長官クラツベに次のように上申した。「使節出迎えとそれへの随行のため、外務省は、アジア局長で七等文官オステン＝サケン男爵を派遣、サントクト・ペテルブルグまでの航海中、使節と緊密な関係を保つよう求めました。これにより、閣下には、外務省官吏、及び、帝室宮内省が任命した者の受け入れのため、特別仕様の軽蒸気艇【легкий пароход = light steamship】が七月二日午後三時、英国海岸【英国海岸通り】の「通り」部分の省略⁽²²⁾埠頭に到着するよう、サントクト・ペテルブルグへの出発ご手配をお願い致します」。オステン＝サケンのために外務省アジア局は、海軍省監査局【Инспекторский департамент морского министерства】に「官吏用の部屋⁽²³⁾を用意する指示を出す」よう求めた。

これを受け、海軍省監査局を代表して、侍従武官海軍少将ミハイル・

(211) 一八六二年の日本使節（クリモフ）

バヴロヴィチ・ゴリツイン公爵（一八二二—一八六八）は、アジア局に次のように伝えた。「使節の送迎のため、外務省差遣の官吏を蒸気フリゲート艦に乗艦させるよう指示が出されました。官吏は、蒸気フリゲート艦での使節一行の部屋割り当て、及び、航海中の便宜の供与に関するすべてのことに関して、同目的のために海軍省から派遣されるモジャイスキー海軍少佐の指示を仰ぐことになりましょう。外務省の官吏を含め、出発予定者全員を蒸気フリゲート艦スモーリー号に乗艦させるため、七月一二日午後四時までに英国海岸通りの埠頭に蒸気艇イリメ二号を用意する予定です²⁴」。海軍省は時刻を若干変更している。すなわちアジア局が依頼したのは「午後三時」であったのに対し、「午後四時」となっている。

ロシア外務省代表のオステン＝サケン男爵、海軍省を代表するV・V・モジャイスキーの他に、スヴィネミュンデからクロンシュタットへの海上移動時には、使節の歓迎式典と接待のため、必要な食器その他の物品と共に、宮内侍従職員も派遣された。このために、帝室宮内省宮内局は海軍省監査局に、スモーリー号への宮内侍従職員の乗艦と物品の積み込みのため、出発前日の正午までに、荷船【гопакси = barge】を冬宮海岸通りに係留するよう要請をした²⁵。また艦にはオーケストラ団員も乗り込んだ。文書には「日本使節を迎えにシュテチンに出发するフリゲート艦スモーリー号に楽団が」と記されている²⁶。一八六二年七月一九日付『クロンシュタット報知』紙（第五六号）は、蒸気艇には「その他に、歓迎式典のためにクロンシュタット港湾楽団が派遣された」と報じている²⁷。団員名簿には、七月一四日および到着日の七月二七日にそなえて、「クロンシュタット港湾楽団」の内の三三人の名が記されている²⁸。

海軍省監査局は、海軍少将ゴリツイン公爵の名において帝室宮内省宮内部に宛てた書簡の中で、フリゲート艦をドイツに派遣する下準備の総

仕上げを以下の六項目にまとめている。

「一、蒸気フリゲート艦スモーリー号は、シュテチンからの日本使節の移動に任じられ、予定通り、この七月一二日夕方、クロンシュタット港を出発する予定である。

二、一日正午までに、冬宮【「海岸通り」が省略】の埠頭に、一二日早朝、宮内調理部のためと必需物品積み込みのための荷船を用意し、それら物品をクロンシュタットのフリゲート艦スモーリー号に向かうための特別仕様の蒸気曳航艇【гокон = tugboat】に積み込む。この蒸気艇で宮内侍従官も移動する²⁹。のみならず、「それと同時に、新海軍省【hoboe ammiralshetsiro = the new Admiralty】において、フリゲート艦スモーリー号にメクレンブルグ大公号の乗組員と物品を運ぶための別の荷船が用意されるはずである」。それら乗組員および物品は七月一日に新海軍省に届けられる予定である。「二隻の荷船は、同じ蒸気曳航艇により曳航される」³⁰。

三、七月一二日午後三時過ぎ、帝室宮内省宮内部から派遣される官吏ランガス、及び、スモーリー号で出発する他の職員をフリゲート艦スモーリー号まで乗せるため、英国海岸通りの埠頭に、蒸気艇イリメ二号を用意する。

四、フリゲート艦スモーリー号には、皇帝陛下のご命令により、使節の迎えと随行のため、海軍省からはモジャイスキー海軍少佐が派遣される。ランガンズ氏は、蒸気フリゲート艦での使節一行、及び、他の人員の部屋割、さらに航海中の便宜の供与に関するすべてのことに対して、同少佐の指示を仰ぐこととする。

五、使節のクロンシュタット到着後は、蒸気艇二隻が用意される。うち一隻は使節の荷物で、それらは直接サンクト・ペテルブルグに運ばれる。

六、蒸気フリゲート艦の指揮官として海軍省から派遣されるモジャイスキー海軍少佐、並びに、アジア局から派遣されるオステン＝サケン男爵は、フリゲート艦スメーリー号乗艦時、シユテチン滞在中、さらに、復路において、宮中からの協定文書【*ppakrament*】を所持していなければならぬ⁽³¹⁾⁽³²⁾。

七月一日、変更がなされた。帝室宮内省からは、ランガンズ氏の代わりに八等宮内官【*top-dyubep*】ブルジュアが派遣され、ナルイシキン氏の代わりにバルテネヴァ女官がトルストイ伯爵家を代表して乗艦、さらに、「リヨン陸軍大佐のプロシヤ勤務時の皇帝陛下の侍従武官で近侍【*kamejunep*】がスメーリー号に乗り組むこと」がそれぞれ許可された⁽³³⁾。艦長のレヴィツキー海軍中佐はその報告書の中で次のように書き添えている。「クロンシユタット港湾長官副官の署名入りで私に送付された、本年六月一日付第九一三三号、及び、同七月一〇日付第九三一一号、両海軍省監査局文書によれば、日本使節出迎えのためにスヴィネミュンデに向かったのは、乗客としては、リボピエル伯爵一族のバルテネヴァ嬢とミトウソヴァ嬢、貨物としては、馬車二台、スヴィネミュンデ宛のメクレンブルグ大公のそれほど嵩張らない荷物、及び、八等宮内官【*top-dyubep*】ブルジュアの持ち物であった⁽³⁴⁾」。ランガンズがブルジュアに交代したことを前述したが、双方とも艦に乗り合わせていたことは、我々が調べた文書館ファイルの中に記されている。

クロンシユタット港湾司令長官を通じて、モジャイスキーは海軍省監査局からの命令を受け取った。それは、使節がスヴィネミュンデを出発した日に関し、オステン＝サケンから知らせを受け取り次第、「そのことを監査局に電信で知らせるように」という内容のものであった⁽³⁵⁾。

一九六二年七月二四日、侍従武官長でアジア局長のN・P・イグナチエフはM・P・ゴリツイン公爵宛てに、在ベルリン・ロシア公使から外

務省に、日本使節がドイツの首都を二四日に出発したこと、同日夕方には使節は「スヴィネミュンデからサンクト・ペテルブルグに向けて蒸気艦で出発するものと思われる」との知らせがあったことを伝えた⁽³⁶⁾。

一八六二年の使節一行の一人、後の慶應義塾大学を創設した有名な学者である福沢諭吉は、後に「西航手帳」(「西欧への海上旅行覚え書き」の意)と「西航記」(「西欧旅行記」の意)を残した。使節の中で彼は、オランダ語と英語の通訳の一人であったが、「覚え書き」(「西航手帳」)の中でオステン＝サケン男爵とワシーリー・モジャイスキーとの出会いを特に記している。ここでは二人の姓名がフランス語で書かれている。おそらく福沢は名刺からそのまま写したのであろう。[Le Baron Frederic d'Osten Sacken, Adjuvant Capitaine Lieutenant Basile Vajasky]とある。モジャイスキーの名前を記すに当たって福沢は、日本人に特徴的な間違いであるが、「v」音と「b」音を区別せず、*Vasile*を*Basile*と記している。福沢は、ドイツで「この二人と七月七日(グレゴリオ暦)【西暦】一八六二年八月二日)にブンゼンの部屋で会った」と記している⁽³⁸⁾。ここでは姓は日本の音節文字である片仮名で「ブンゼン」と書かれている⁽³⁹⁾。このブンゼンについては、フォードル・ロマノヴィチ・オステン＝サケンもサンクト・ペテルブルグに送った外交至急便の中で伝えている。オステン＝サケンはブンゼンを通じて、日本人に対し、姓名を漢字で書いた正確で詳しい団員名簿を提出するよう、何度も求めている。結局彼は、望む名簿を日本人から受け取ることができなかったが、当のブンゼンの言葉に従えば、日本人たちは「極めて怠惰である」というのがその理由のようである⁽⁴⁰⁾。福沢は、ベルリンからクロンシユタット、そしてサンクト・ペテルブルグへの旅に付き、その様子を簡単に伝えている。七月一日(一八六二年八月五日)午前八時、日本人たちはベルリンを出発し、一時にシユテチンに到着した。この町で二七〇人の裕福なドイツ人商人

と午餐を共にした後、午後三時に二隻の蒸気艇に乗り、オデイル河を下った。夕方七時にスヴィネミュンデに到着、ロシア艦スメリー号に乗り込み、直ちに出航した。福沢は、艦の蒸気機関は四五〇馬力、排水量(メモ帳では重量とされている)は二、二二六トンと記しているが、実際には汽罐は四〇〇馬力、排水量一、七八四トンであった。

市川渡(清流の名でも知られている)が和暦七月一日(グレゴリオ暦【現行暦、新暦】八月五日)付の日記の中で記しているところに従えば、使節は午前六時過ぎにホテルを出て鉄道駅に向かった。午前八時、日本使節を乗せた列車は東南方向に向け出発した。それから河川蒸気艇に乗り込んだが、乗船時には礼砲が一五回放たれた。二時過ぎ、船は北方向に向け出発した。船には管弦楽団があり、日本の客人たちの耳を音楽で楽しませた。スヴィネミュンデに到着後、日本人たちはロシア艦スメリー号に乗り移った。船は幅六間、長さ三〇間、汽罐は四五〇馬力、乗組員は一五〇人であった。マストには日本の旗がはためいていた。航海中一日に三回三〇人から成る管弦楽団が音楽を演奏した。夕方八時、蒸気艦は埠頭を離れ、北に向け進路をとった。⁽⁴²⁾一方、益頭駿次郎は、およそ戌の刻(午後七時から九時まで)にペテルブルグに向かったと記し、野澤郁太はロシア艦の大きさに付き「スメリー号の長さは二五〇⁽⁴³⁾フィート、幅は四〇フィート⁽⁴⁴⁾とフィートで記述している⁽⁴⁵⁾。

艦に乗り込んだ後、使節は昼食に招かれた。昼食の最中にスメリー号は抜錨を始めた。「使節はこれに気付き、席を立つ許可を求めた。彼らはもう一度プロシヤの人たちに別れを告げることを希望したのである。そして実際全員が甲板に上がった。スヴィネ河が狭くなっている部分の河岸には、人々があちこちに立っており、そこを蒸気艦が進んで行く。その間、ずっと日本人たちは四方に向かってお辞儀をしていた。それから彼らは下に降りて、昼食を続けた。日本人たちのこの礼儀正しさを

と並々ならぬ配慮は、ベルリン、及び、スヴィネミュンデの一般の人々の遠慮のない好奇心やある種の物見高さと好対照を成すものであった。⁽⁴⁶⁾一九八二年七月一九日付の『クロンシュタット報知』(第五六号)は、「スメリー号は大きな外輪蒸気艦【конечный паровод = paddle-wheel steamer】で、船室は広く作りも立派で、大人数の使節随員が、ゆつたりと落ち着くのに十分適していた」と伝えている⁽⁴⁷⁾。

ドイツでの日本使節のスメリー号への乗艦の様子に付き、一九八二年七月二九日付の『クロンシュタット報知』(第五九号)が伝えているが、「これは使節に同行した一人が語ったことに基づいており、その信憑性は保証しうるものである⁽⁴⁸⁾」。新聞自体が市と海軍要塞を代言するものである以上、情報源がクロンシュタット港湾長官付参謀ワシーリー・ワシーリエヴィチ・モジャイスキー海軍少佐であったであろうことは想定に難くない。同紙が創設されたのは一八六一年で、一八六一年七月一日から週二回、一八六二年からは週三回発行されていた。海軍士官たちが、新聞を発行する目的で団体を作ったのがその始まりである。当初は三人の編集者があり、その筆頭がニコライ・アレクサンドロヴィチ・ルイカチエフ(一八三二—一八九二)、一八六一年に海軍少佐、後に海軍少将、そして作家となったが、当時の海軍士官が皆そうであるように、海軍士官学校の卒業生であった。またその外に三人の編集助手がいた。全員が無報酬で仕事をしていた。創設者たちは次のように表明している。「我々の新聞は『海軍雑誌』【Морской сборник】が果たしている課題の遂行に部分的に寄与するものとなろう。『海軍雑誌』は月刊雑誌であるために、報道によつてはすでに生きた今日的な興味を失った頃に伝えられているものもあるのはやむを得ない。これに対して『クロンシュタット報知』は週二回の発行なので、すべての報道をリアルタイムで伝えることが可能となろう⁽⁴⁹⁾」。ルイカチエフはこの新聞を終生主筆し

たと同時に、クロンシュタット港湾長官の下で勤務したが、その長官の副官を務めていたのがV・V・モジャイスキー海軍少佐であった。このことから、日本人たちのスメーリー号への乗艦、移動、行動に付き編集者に伝えたのはモジャイスキーであったと想定するのは論理に適っている。またN・A・ルイカチェフ自身数編の記事を『海軍雑誌』に掲載している。

さらに『クロンシュタット報知』は次のように伝えている。「七月二十四日日本使節はプロシヤの蒸気軍艦オデイル号でスヴィネミュンデに到着した。荷物は前もって三艘の民間蒸気船で送られていた⁽⁵⁰⁾。使節の荷物は、同紙の報道によれば、およそ三〇〇個の箱と包みから成っていた。中でも使節たちが最も気を遣っていたのが、「大使の信任状と条約の写しが収められた木製の籠のような箱であった。公使は箱を指しながら、『これは私の命である』と何度か言っていた。お金の入った長持にはまったく注意が払われていなかった。確かに長持は二〇プードもの重さがあり、スヴィネミュンデの埠頭に無造作に投げ置かれてはいたが、こっそり持つて行くのは容易ではなかった⁽⁵¹⁾」。

「フリゲート艦スメーリー号で使節たちは式典と音楽で迎えられ、彼らは士官や乗組員たちときわめてにこやかに愛想良く挨拶を交わした⁽⁵²⁾」。日本人は音楽師たちが大変気に入り、正使竹内下野守(「シモツキー公」)は、音楽師が日本人たちに対して演奏した時、「その度に謝意を表するよう命じたのであった」。「使節たちは艦長とはすでにベルリンで知己となっていた。また、外務省官吏オステン＝サケン男爵、および使節の出迎のためスメーリー号で派遣されたモジャイスキー海軍少佐もベルリンで使節たちに紹介されていた⁽⁵³⁾」。淵辺徳蔵は七月一日(一九六二年八月五日)付の日記の中で、海軍士官のうちの二名がかつて長崎と下田に行ったことがあり(プチャーチン使節のこと)、彼らは日本語を少し

話した、と記している⁽⁵⁴⁾。

「出迎えが終わって使節たちは、宮廷の指示に従って彼らのために用意された午餐の席に就いた。彼らはオステン＝サケン男爵、モジャイスキー海軍中佐、艦長のレヴィツキー海軍中佐、および数名の士官を席に招いた。午餐はヨーロッパ式のもてなしであったが、日本人の好みを取り入れ、米の料理が何点か用意されていた。午餐後のデザートに使節たちは大根とおろしわさびを所望した。この独創性にまさに日本人の好み凝縮されていた。わさびと大根は、彼らが大いに気に入っていたシャンパンを飲む際のみであった⁽⁵⁵⁾」。

文書館のファイルの中に「日本使節構成員名簿」がある。この名簿は「蒸気艦スメーリー号上で日本人通詞たちが言ったままに書かれた⁽⁵⁶⁾」、すなわち、我国の海軍軍人たちが、自分たちが聞いた通りに書き留めたものである。従って、以下に引用した名簿は今日では読みにくいものであり、実際の日本姓を確定することが事実上不可能なものも少なくない。そこで、() の中に、日本で通常である「姓名」の順序で、ポリヴァノフ方式に則ったロシア文字転写【省略】と漢字表記、及び、年齢を表示した。

【以下、【】内は、原文ロシア文字を訳者がローマ字に転写したもののローマ字表記は「英国式」に則った。ただし、*ъ*、*ы* はそれぞれ「*я*」で、*ж* は *ш*、*ч* は *щ*、*х* は *ш* で表記した。*к* は *г* と表記してあるため、ロシア文字部分の *т* と *к* が、ローマ字表記では同じになるケースがある(つまり両方とも「*tsi*」)】

一. Takeno yuri Simodske nokami [Takeno utsi simodske nokami]

正使(竹内下野守 五六歳)

二. Marteo daira Ivanu nokami [Mateju daira Ivani nokami]

副使(松平石見守 三二歳)

- 三. Kio kok Hoto nokami 【Kio kok Noto nokami】
副使（京極能登守 三八歳）
- 四. Sibata sada Taro 【Sibata sada Taro】
随員頭（柴田貞太郎 三九歳）【外国奉行支配組頭】
- 五. Mariama Takisiro 【Mariama Takisiro】
秘書（森山多吉郎 四二歳）【外国奉行支配調役格・通弁御用頭取】
- 六. Xitaka kei Saburo 【Xitaka kei Saburo】
財務顧問（日高圭三郎為善 二五歳）【勘定役】
- 七. Fukuta Saku Taro 【Fukuta Saku Taro】
（福田作太郎 二九歳）【徒目付】
- 秘書
- 八. Midzjusimma Rakutaro 【Midzjusimma Rakutaro】
（水品楽太郎 三一歳）【外国奉行支配調役並】
- 九. Okasaki To saemon 【Okasaki To saemon】
（岡崎藤左衛門 二七歳）【外国奉行支配調役並】
- 一〇. Masidzju Sun Dzino 【Masidzju Sun Dzino】
技師（益頭駿次郎 三三歳）【普請役】
- 一一. Futsi nobe tokujuso 【Futsi nobe tokujuso】
（淵辺徳藏 四五歳）【勘定格調役】
- 一二. Teda Iuske 【Teda Iuske】
（上田友助 四四歳）【外国奉行支配定役元締】
- 一三. Mori Xarcsi Taro 【Mori Xarcsi Taro】
（森鉢太郎 二八歳）【外国奉行支配定役】
- 一四. Saito Dai Nosin 【Saito Dai Nosin】
（齊藤大之進 四〇歳）【外国方同心】
- 監視 【Смотрителя 小人目付】
- 一五. Takamarcsi Xiko Saburo 【Takamatsu Xiko Saburo】
（高松彦三郎 四三歳）
- 一六. Iamata Xaippo 【Iamada Xaisiro】
（山田八郎 四〇歳）
- 通詞 【定役格通詞】
- 一七. Fukadzi zhen isiro 【Fukadzi zhen isiro】
第二秘書（福地源一郎 二二歳）
- 一八. Taisi kosakiro 【Taisi kosakiro】
（立広作 一七歳）
- 一九. Okhoda zhen saburo 【Okhoda zhen saburo】
（太田源三郎 二七歳）
- 二〇. Fukuzama iio kil'zi 【Fukuzama iju kil'zi】
（福沢諭吉 二七歳）
- 全員英語とオランダ語を話す。立広作はフランス語を話す。【太田は唐通事】
- 二一. Mitsukuri Siokhei 【Mitsukuri Siukhei】
（箕作秋坪 二七歳）
- 二二. Matsuka Kohan 【Matsuka Kohan】
（松木弘安 三〇歳）
- 両者とも翻訳方兼医師。

医師

- 二三・ Takasima iro keji 【Takasima iju keji】
 (高島祐啓 三八歳)
 二四・ Kawasaki to tiy 【Kawasaki to tiu】
 (川崎道民勤 三二歳)

家来

- 二五・ Takama Ooske 【Takama Ooske】
 (高間応輔 四八歳) 【竹内下野守家来】
 二六・ Nagava Dzjooke 【Nagava Dzjooke】
 (長尾丈輔 三三歳) 【竹内下野守家来】
 二七・ Nozava Ikka 【Nozava Ikka】
 (野澤郁太「伊久太」⁽⁵⁷⁾ 四二歳か) 【松平石見守家来】
 二八・ Isigawa Batari 【Isigawa Batari】
 (市川渡 三九歳か) 【松平石見守家来】
 二九・ Iwasaki Byn' Danfjo 【Iwasaki Bun Danfju】
 (岩崎豊太夫 三五歳か) 【京極能登守家来】
 三〇・ Kurosova zinj' Saemon' 【Kurosawa zin Saemon】
 (黒沢新左衛門 五三歳) 【京極能登守家来】
 三一・ Haramatsi Gorodzi 【Nagamatsi Gorodzi】
 (長持五郎次 一六歳) 【柴田貞太郎家来】
- 補助【重兵衛を除き小使賄方兼】
 三二・ Sano Tschke 【Sano Tschke】
 (佐野貞輔鼎 三三歳か)
 三三・ Dzjo Bee 【Dzju Bee】

(重兵衛 二六歳か) 【伊勢屋八兵衛手代】

- 三四・ Tsjone Coo 【Tsjune Soo】
 (佐藤恒蔵秀長 四一歳か) 【松平親貴家来】
 三五・ Xaara Karkosoo 【Khaara Kakusoo】
 (原覚蔵 二四歳か) 【松平阿波守家来】

執務【小使賄方兼】

- 三六・ Sjore Sineke 【Sjuge Sineke】
 (杉徳輔。孫七郎とも。二七歳) 【松平大膳大夫家来】
 三七・ Isji Kijoro Kwandzi 【Isi Kijuro Kwandzi】
 (石黒寛二 四〇歳か) 【松平肥前守家来】
 三八・ Oka Sikana Ske 【Oka Sikana Ske】
 (岡鹿之助 三〇歳か) 【松平肥前守家来】

中佐(署名) Девлюцкий レヴィツキー⁽⁵⁸⁾

「海上に出るから蒸気フリゲート艦スメーリー号上では一定の秩序に則った通常の生活が始まった。使節たちは朝八時までに起床し、軽い冷前菜と紅茶を飲んだ。午後一時に二回目の朝食が出され、六時に彼らは食事をとった。

最初の内、日本人たちはまごついていた様子であったが、すぐに口も軽くなり、にこやかになった。彼らは喜んで自分たちの旅を語り、或る者たちはロシア語を習い始めた。日本人の多くはすでにヨーロッパ風の身なりをし、長靴を履き、ほとんどの者が時計を所持しており、それに夢中であった。使節の年少の者は何事にも若者らしい無邪気な好奇心を口にし、非常に伸び伸びとして明るかった。年長の使節たちは常に重々

しく真面目で、威厳に満ち、上品な礼儀正しさが際だっていた。航海の間、彼らは多くの質問をしたが、その質問は、皆が航海術や航海天文学の知識を持ち合わせていることを如実に証明するものであった。例えば、毎日正午になると彼らは、観測され算出された緯度と経度を聞くのであった⁽⁵⁹⁾。

陰暦七月一日(グレゴリオ暦八月六日)付の市川の日記には、ロシア人乗組員から知り得た現在位置に付き「北緯五五度三〇分、東経一九度二三分」と書き留められている。市川はこの日一日に付き次のように手短かに記している。「晴天、東の風、気温六二度、蒸気機関の力で艦は北に進路をとる、周囲は海のみ、ロシアの首都ペテルブルグまで三二七里⁽⁶⁰⁾。昨日の出航時から七月一日正午までに艦は一二六里を走航した⁽⁶¹⁾。益頭駿次郎はその日記の中で同様の現在位置を示し、同じく約一二六里を走航したと記している⁽⁶²⁾。

次の日(七月二日、グレゴリオ暦で八月七日)も市川は同じく現在位置を記している「北緯五八度二分、東経二〇度二〇分」。この日に付き彼は次のように記している。「晴天、西北の風、気温六〇度、艦は蒸気で航行。海は穏やかである。正午から艦は北東方向に進路を変えた。左舷ならびに右舷方向に島が幾つか認められた。午後六時に、大砲を三段に装備した大きな軍艦に遭遇した。互いに信号旗で挨拶を送った。その後で軍艦の大砲から一一発の祝砲が放たれた⁽⁶³⁾。一方『クロンシュタット報知』は、一五発放たれたと伝えている。「ダゲロルド岬まで北上したところで、スメーリー号は大砲一一門を備えたスクリュー艦ニコライ一世号と出会った。同艦は帆走しており、使節の旗に対して礼砲を一五発放ち、スメーリー号からも一五発の応答をした。使節たちは軍艦をより近くで見ることを希望した。同艦が浮遊停船状態に入ったので、蒸気艦スメーリー号は同艦の周囲をぐるりと回った⁽⁶⁴⁾。ニコライ一世号は、

一一門を備えたスクリュー艦で、排水量は五、四二六トン、長さは二三四フィート、幅は外板部分を含めて五八フィート三・五インチであった⁽⁶⁵⁾。建造が開始されたのは一八五五年六月二五日、進水式は一八六〇年五月一八日であった。建艦が行われたのはサンクト・ペテルブルグの新海軍省の造船所で、建艦責任者はミハイロフ陸軍少尉であった。軍艦としては一八七四年一月二六日に軍籍登録外となった⁽⁶⁶⁾。一八六二年にはニコライ一世号はロシア海軍の最新鋭艦の一つであった。艦の竣工は画期的な出来事で、進水式は予め通知され、式にはアレクサンドル二世自身が臨席し、陸軍、海軍、政府の高官が海軍省から招待された。「(海軍省)監査局は、新海軍省で建艦中の軍艦ニコライ一世号の進水式を本五月一八日午後一時に皇帝陛下のご臨席を賜って行うことを謹んで告示する。進水式にご列席の方は常装で、陸海軍の将官は大綬着用、建艦責任者ならびに乗組員は礼服で来られるよう⁽⁶⁷⁾」。

日記「ヨーロッパ旅行覚え書き」【尾蠅欧行漫録】の筆者市川は、船室の机の上に二、三冊の本が置かれていたと記している。そのうちの一冊が和露辞典『和魯通言比考』で、初代在日本・ロシア領事ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケヴィチ(一八一五―一八七五)が日本人橋耕斎の協力を得て編纂したものである。辞典の表紙には橋耕斎(一八一九―一八八五)の名が漢字で「橋耕斎」と記されている。これを目にした市川は、この日本人がおそらく辞書の編纂者にちがいないと、今もロシアに

いるはずと結論づけている。
気温が徐々に下降し始め、日本人たちも暖かく着込み始めた。昨日の正午からの艦の走航距離は二四六里であった⁽⁶⁸⁾。益頭駿次郎はこの日の日記の中で、北緯は同じで東経が二〇度二分という若干異なった位置を記し、二四〇里を走航したとしている⁽⁶⁹⁾。野澤郁太の一二日付の日記の中には、「昨日の正午から本日の正午までの海上走航距離は二四〇里、現

在位置は北緯五八度二分、東経二二度二分」と手短かに記している。⁽⁷⁰⁾日本人たちは毎日、正午の艦の地理的位置を質問していたにも拘わらず、日記では若干のずれが見られることが伺える。

航海の最終日の七月一三日(グレゴリオ暦八月八日)に市川は、晴天で東の風、気温は六〇度と書き留めている。艦は進路を東から北寄りに変えた。海は穏やかであった。左右の舷側から多数の鳥が姿を現した。さらに日本人たちは数十艘の帆船を目にしている。スメーリー号では祝砲が発せられた、今日が皇后の誕生日ということが理由だった、と日記の筆者は記している。酉の刻頃(午後五時から七時まで)にクロンシュタットに到着した。あたりは既に暗くなっており、何も見えなかった。左舷側、右舷側とも堡塁があった。港にはおよそ三〇〇艘の船が停泊していた。市川は、数年前のクリミア戦争の際、英仏連合艦隊がロシアの首都に進撃しようとしたが、ここを突破することができなかった、と記している。クロンシュタット要塞はペテルブルグを堅固に守り、連合艦隊は退却する以外にはなかった。⁽⁷¹⁾

淵辺徳蔵は同じくその日(和暦七月一三日)の日記に、クロンシュタットに到着したのは夕刻、両側に堡塁が見えたが、月明かりのため判別が困難であった、と記している。⁽⁷²⁾同日の益頭駿次郎の日記によれば、地理的位置は北緯四九度五九分、東経二六度四二分、クロンシュタットへの到着時刻は、市川が酉の刻すなわち午後六時頃としているのに対して、益頭は、二四〇里走航した後、午後一〇時頃と記している。⁽⁷³⁾益頭は、クロンシュタットには多くの商船と軍艦が停泊しており、クロンシュタットはよく装備された要塞であると記している。野澤郁太は航海の最終日の七月一三日の日記に、「本日正午までに二二五里走航、位置は北緯五九度五九分、東経二九度三〇分。本日午後九時頃に「コロンスタット」という名のロシアの港に到着、同地に停泊した」と二つのことを手

短かに記している。⁽⁷⁴⁾以上の引用から分かるように、走航距離ならびに地理的位置についての日記資料はそれぞれ異なっており、時には相当な違いが見られる。

「航海初日、オステン＝サケン男爵はシモツキー公(竹内下野守)に、軍事地形廠で印刷されたばかりの一二葉から成るロシアの地図を贈呈した。翌日には艦長が公に蒸気艦と汽罐の設計図と見取り図を贈呈した。そして三日目の到着日には、オステン＝サケン男爵がペテルブルグの市街図を公に贈呈した。これらの贈り物の最後を締め括ったのが、使節団を迎えに派遣された三人の人物の写った肖像写真であった。これらの小さな贈り物を日本人たちは大変気に入る、蒸気艦スメーリー号で共に航海をした仲間、という友人的関係を物語るものであった」⁽⁷⁵⁾。

一八六二年八月五日付の『クロンシュタット報知』(第六二号)は以下のことを報じている。「使節のうちの何人かは船酔いになった。海上病に罹ったのだ。彼らが、『クロンシュタット報知』の何号か明確ではないが、「海上病」という見出しで、この耐え難い病の予防法が載っている記事の号を読んでいなかったとしたら、これほど気の毒なことはない。第一使節のシモツキー公(竹内下野守)の船酔いが他の者よりもひどかったとのことである。その間、同公は、きわめて興味深い、また美味にちがいない、ア・ラ・ジャポネの食べ物以外には何も口にしなかった。その食べ物、我が国で精進料理と呼ばれている部類に属する。今丁度、精進齋期に入ったところなので、この日本料理の知恵を試すにはうってつけであろう。特に精進の齋を守る中で、精進料理の選択に普通困っている人には、お勧めする。我々は、特に、その作り方を書き留めておいたので、試してみることをお勧めする。米少々に水を注ぎ煮立たせる。要するに米の粥を作る。その中にニシンとイワシ少々を切り刻んだものを入れ、おろし大根とおろしわさびを加えてかき混ぜる。仕上

げには酢を落とす。食べる時は、一口ごとに、ちよほど日本人たちがしているように、シヤンパンで口直しをするとよい⁽⁷⁶⁾。

航海中使節たちは、『クロンシュタット報知』が報じているように、絶えず写生をし、見聞を書き留めていた。

一九六二年九月一九日の『クロンシュタット報知』(第八一号)は次のことを伝えている。「日本人たちと起居を共にした者すべて、特に蒸気艦スモーリー号で共に旅をした士官たちは日本人に関して、己に個人的に関係するものすべて対し、整理整頓をし、綺麗好きな人たちであると評している。彼らが割り当てられた船室は、まるで誰も住んでいなかったかのように綺麗になっていた。さらに、日本人が滞在した家、その使用した机、ベッド、それらすべては、非の打ち所なく清潔で、それは際だっていた⁽⁷⁷⁾。

七月二十七日、フョードル・ミハイロヴィチ・ノヴォシリスキー海軍少将(一八〇八一—一八九二)⁽⁷⁸⁾は、クロンシュタットからペテルブルグの海軍省長官に宛てて次のような電報を打った。「午後一〇時日本使節を乗せた蒸気艦スモーリー号到着⁽⁷⁹⁾。

ここで、福沢諭吉が書き留めたことに特に触れておきたい。一一日(八月六日)と一二日(八月七日)には彼は何も記していない。七月一三日(グレゴリオ暦八月八日)に彼は、夕方六時にそれほど大きくない島セスカル(Seskar)を目にしたと書いている⁽⁸⁰⁾。島には燈台が設けられており、高さは二六〇フィート、約四八・七七mとある。続けて福沢は、艦長はレヴィツキーであると記している。午後七時、クラースナヤ・ゴールカを右舷方向に見て通過した。手帳の中で福沢は、地名を片仮名で「カラスナヤゴルカ」と書き留め、その後の括弧内に英語で「このロシアの言葉は Red mountain の意味である」と付け加えている。しかし彼は「西航海帳」の中で、この地名の意味を漢字で「赤き山の義」と正

しく伝えていながら、片仮名では「カラスナヤシロ」と間違って記している。多分福沢はかなり後に、自分の手帳を参向しながら「西航海帳」を書いたのであろう。八月後半、日本使節は、クラースノエ・セローで行われたロシア陸軍の演習に立ち会った。日本人たちのどの日記も、このことに大きな注意が向けられており、演習に関連したことがすべて詳細に記述されている。軍人たちの整然とした行動が日本人たちの強い印象を与えたであろうことは想像に難くない。おそらくこのことが「クラースナヤ・ゴールカ」の地名を間違えた原因になったのであろう。ちなみに、使節は帰路に就く前にアレクサンドル二世の郊外の離宮であるツァールスコエ・セロー(やはり「セロー」)に招かれている。クロンシュタットまでは、三〇イギリスマイルの海上移動が残っていた、と福沢は記している。午後一〇時、使節はクロンシュタットに到着し、船中で一泊した⁽⁸¹⁾。

淵辺徳蔵の一日の日記によれば、その日は雨で、気温は五九度であった。寒いので日本人たちは暖かく着込んだ。正午過ぎ、スモーリー号艦長が来て、河川蒸気艇に乗り換えることを申し述べた。それは豪華な船であった。その船に乗って、約一〇里(三九・二七km)河を遡り、ペテルブルグに着いた。ペテルブルグの地名は漢字で「彼得堡」と記されており、首都は片仮名ではなく漢字で書いていたようである。ただ益頭駿次郎は片仮名で「テイトンヒユルへ」と書いているが、音は相当歪曲されている。岸に降りた一行は護衛付きの四輪馬車に乗り込んで、離宮に向かった。離宮は、淵辺が記したところに従えば、独立した三階建ての建物(離宮)で、ネヴァ河に面していた(この地名も漢字で「尼瓦」と記され、「子ワ」と読みが片仮名で付してある⁽⁸²⁾)。一方益頭は、別の片仮名で「子バ」と書いている⁽⁸³⁾。こちらは、河の名を指しているらしい。益頭駿次郎はその日記の中で、七月一四日(グレゴリオ暦八月九日)一

二時、使節は豪華な河川蒸気艇に乗り込み、随員のためにはもう一隻用意された、と記している。使節と随員には、三人に一人の割合で給仕が付き、紅茶、菓子その他を供した。航行中艦上では楽団が演奏をした。ロシアの首都ペテルブルグ（露西亜府ペートルビルク）に二時頃に到着した。続けて野澤郁太は、歓迎式典と日本使節の滞在先である離宮に行く途中のことに付き、他の団員の日記に比して相当詳しく述べている。さらに、野澤郁太は、日本からの客を応接するためにすべて整えられており、これはヨーロッパの首都ではなかったことである、と記している。使節は三時には離宮に着いた。⁸⁴⁾

『サンクト・ペテルブルグ報知』は、使節が到着したその日七月二七日の午後二時、イギリスの二隻の軍艦、八六門装備のスクリュー艦 St. George 号と一七門装備のスクリュー艦 Chanticleer 号が到着したことを伝えている。ビクトリア女王の次男アルフレッド王子が公式訪問に来たのであった。王子の乗艦した St. George 号とクロンシュタット要塞は「定められた国家祝砲を二一発ずつ」交換し合った。夕刻になり、イギリス商船の船長と水夫たちが、何百もの荷船や商人用小船、小型船艇で港外に出て、同国人の無事到着を祝った。更に港外には、英国女王陛下の誕生日にちなみ旗を掲げた多くのロシアの艦艇が停泊していた。つまり、日本使節を乗せたスメリー号が到着した午後九時過ぎ、クロンシュタットとその港外には、美しい風景が広がっていたのである。七月二八日一二時、日本使節はスメリー号から宮中蒸気船ストレリナ号に乗り換えた。使節の荷物は、その前に蒸気船スラヴァンカ号とペテルブルグ号で運ばれて行った。⁸⁵⁾

ロシア側には、将来の日露関係発展に向け、ふさわしい環境を創り出すべく、最初の日本使節を可能な限り良い歓待をするという課題が課せられていた。そしてロシア政府は、この点において、少なからぬ成功を

収めた。すべてのヨーロッパ諸国の政府は、日本で商人リチャードソンが殺害される（いわゆる生麦事件）までは、使節たちに最も良い印象を与えることを念頭に置いていた。日本人たちに最も良い印象を残したのはドイツでの応接であった。野澤郁太は、ドイツからロシアに向かった日の日記に、プロシヤでは日本人は非常に好感を持たれている、と記している。⁸⁶⁾ その際は、語の表記としては極めて珍しい二項式のかたちを用いて「プロシヤ・ホッコク（李国）」と書いている。しかし、日本使節は、ロシア領に入った時点、換言すれば、軍艦スメリー号に乗り込んだ瞬間、一行は自分たちにそがれている好意、歓迎の気持ち、高い水準の応接を身を以て感じたのであった。

（翻訳：有泉和子）

〔注〕

- (1) ロシア語一次史料に基づき日付はユリウス暦【露暦】。
- (2) РИМ. Ф.473. Оп.3. Д.326. Л.л.59-59 об.
- (3) 本稿の地名は一次史料に出てくる通り。Шерин 【=Shetin】は今日では Шерин 【=Shchetsin】と表記されるポーランドの町、オデイル河河口の港。オデイル河の名前はドイツ語起源、チェコ語、ポーランド語の発音では Odra 【=Odra】河。第二次世界大戦まで、この町はドイツ領となり、プロシヤ・ポメラニア県の中心。
- (4) РГАВМФ. Фонд 283. Опичь 3. Дело 1826. Л. 5.
- (5) РГАВМФ. Фонд 283. Опичь 3. Дело 1840. Л. 15-15 об.
- (6) スヴェイネミュンデはプロシヤ・ポメラニア県の要塞化された軍港。本質的にシュテチンの外港。
- (7) サージェンはロシアの長さの単位で、三アルシン、二・一三三六mに当たる。一アルシンは一六ウエルシヨークに当り七一・一二cm。
- (8) プードはロシアの重量単位。一プードは一六・三八kg。

- (9) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1826. Л. 93.
 (10) Там же. Л. 92 об.
 (11) Там же. Л. 96.
 (12) Кронштадтский вестник. 19 июля 1862 г. № 56.
 (13) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Л. 3.
 (14) ロシアの度量衡制度は一フイートは一〇七センチメートル、あるいは一ニインチに当たり、現代のメートル法では〇・三〇四八メートルとなる。従って、船は長さ六〇・九メートル幅一一・三八メートルである。
 (15) Веселого Ф. Ф. Список русских военных судов с 1668 по 1860 год. Отдел первый. Санкт-Петербург, 1872. С. 112-113; Моисеев С. П. Список кораблей русского парового и броненосного флота (с 1861 по 1917 г.). Под редакцией доктора военно-морских наук капитана 1 ранга, Новикова Н. В. М., 1918. С. 41.
 (16) 淵辺徳藏「欧行日記」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書 第三卷、一九三〇年)八九頁。
 (17) РГВМФ. Фонд 432. Опись 5, дело 3723. Лл. 1-3.
 (18) Там же. Л. 4.
 (19) Общий морской список. Часть VII царствования Александра I. Д-О. СПб., 1893. С. 546.
 (20) チェルヴォニエツとは、一八一―一九世紀のロシア金貨で、一チェルヴォニエツは三ルーブル相当に相当する。
 (21) РГА ВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Лл. 12-13.
 (22) Там же. Лл. 19-20.
 (23) Там же. Л. 18.
 (24) Там же. Лл. 21-21 об.
 (25) Там же. Л. 17.
 (26) Там же. Л. 2.
 (27) Кронштадтский вестник. № 56. 19 июля 1862 г.
 (28) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1826. Лл. 106, 116.
 (29) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Л. 22.
 (30) Там же. Лл. 26-26 об.
 (31) 言い換えれば、この兩名は現物給付のかたちでの派遣で、食事は使節団と一緒にとっていた。
 (32) Там же. Лл. 22-23.
 (33) Там же. Л. 27.
 (34) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1826. Л. 91 об.
 (35) РГВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Л. 24.
 (36) Там же. Л. 46.
 (37) Двоеточием передаем долготу в произношении японского слова.
 (38) 以下日付は、当時日本で採用されていた太陰太陽暦で記されたものを、そのまゝロシア語に訳し、()内にグレゴリオ暦に則ったものを付した。
 (39) 福沢諭吉「西航手帳」(『福沢諭吉全集』第一九卷、一九六二年)一〇八頁。
 (40) АВПРИ. СПб ГА-1-6. Фонд 161. Опись 5, Дело 1 а. Лл. 77.
 (41) 「間」は日本の長さの単位。一間は六尺、一八八八メートル。従って、船の幅は、換算すると、一〇・九メートル、長さは五一・五四メートル。本当は長さ六〇・九メートル幅一一・三八メートルはず。
 (42) 市川渡前掲書四四五―四四七頁。【市川渡「尾蠅欧行漫録」(『遣外使節日記纂輯』第二卷)】
 (43) 益頭駿次郎「欧行記」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書 第三卷、一九三〇年)二七八頁。
 (44) 前掲野澤日記の記述を換算すると、長さ七六・二メートル、幅一一・一九メートル。【野澤郁太「遣外使節航海日録」(『遣外使節日記纂輯』第二卷)】
 (45) 野澤郁太前掲書一九三頁。
 (46) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
 (47) Кронштадтский вестник. № 56. 19 июля 1862 г.
 (48) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
 (49) РГВМФ. Фонд 410. Опись 2, Дело 2458. Л. 6.
 (50) Там же
 (51) Там же.

- (52) Там же.
- (53) Там же.
- (54) 淵辺徳蔵「欧行日記」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書第三卷、一九三〇年)八九頁。
- (54) РГАВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Лл. 118-118 об.
- (54) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
- (55) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
- (56) Там же. С. 249.
- (57) 野澤郁太「幕末遣欧使節航海日録」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書第二卷、一九二九年)一一六頁。
- (58) РГАВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1840. Лл. 118-118 об.
- (59) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
- (60) 一里は三・九二七km。換言すれば、Санクト・Петербурクまで一四四・九五km残っていることになる。
- (61) 市川渡前掲書四四七頁。
- (62) 益頭駿次郎前掲書二七八頁。一二六里は四九四・八四km。
- (63) 市川渡前掲書四四八頁。
- (64) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
- (65) 船の長さは七一・四八m、幅一七・七七m。
- (66) Веселого Ф. Ф. Список русских военных судов с 1668 по 1860 год. Отдел первый. Санкт-Петербург, 1872. С. 70-71; Моисеев С. П. Список кораблей русского парового и броненосного флота (с 1861 по 1917 г.). Под редакцией доктора военно-морских наук, капитана 1 ранга, Новикова Н. В. М., 1918. С. 38.
- (67) РГАВМФ. Фонд 283. Опись 2, Дело 160. Л. 4.
- (68) 市川渡前掲書四四八頁。一二六里は九六六・一一km。
- (69) 益頭駿次郎前掲書二七八～二七九頁。二四〇里は九四二・五五km。
- (70) 野澤郁太前掲書一九四頁。
- (71) 市川渡前掲書四四八～四四九頁。
- (72) 淵辺徳蔵「欧行日記」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書 第三卷、一九三〇年)九〇頁。
- (73) 益頭駿次郎前掲書二七九頁。
- (74) 野澤郁太前掲書一九四頁。
- (75) Кронштадтский вестник. № 59. 29 июля 1862 г.
- (76) Кронштадтский вестник. № 62. 5 августа 1862 г.
- (77) Кронштадтский вестник. № 81. 19 сентября 1862 г.
- (78) 電報には姓が間違っていて書かれている。「ノヴォセリスキー」となっているが、「ヴォシリスキー」である。
- (79) РГАВМФ. Фонд 283. Опись 3, дело 1826. Л. 113.
- (80) セスカル島は、Санクト・Петербурクから一〇〇キロの距離に位置する。クロンシュタットからは七八キロ。今日、行政はレニングラード区キンギセプスキー地区に属する。島の面積は四・一六km²。福沢諭吉が言及している燈台は一八五八年に建てられたもの。高さ、約三〇m。塔は鑄鉄製。燈台は、今日においてすらも機能している。
- (81) Там же. С. 107-108. 福沢諭吉「西航記」(『福沢諭吉全集』第一九卷、一九二二年)四一頁。
- (82) 「欧行日記」前掲書九〇頁。
- (83) 益頭駿次郎前掲書二七九頁。
- (84) 野澤郁太前掲書一九四～一九五頁。
- (85) Санкт-Петербургские ведомости. № 166. 1 августа 1862 г. С. 720.
- (86) 「幕末遣欧使節航海日録」(『遣外使節日記纂輯』日本史籍協会叢書第二卷、一九二九年)一九三頁。

本研究集会は、科学研究費補助金基盤研究A「ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究」(課題番号:三三二四二〇三九、研究代表者:保谷徹)の一環として、その経費の一部も使用して行なった。